

〈実践報告〉

早朝自主研修会における学生の教職への使命感の自覚

土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

渡邊 伸 信州大学教育学部スポーツ科学教育講座

小岩井彰 上田市立北小学校

キーワード：現代教師学演習，教職への使命感，未来道場，早朝自主研修会

1. 早朝自主研修会「現代教師学演習」の始動

信州大学教育学部には、長野県内はもとより全国各地から教職を志す有為な人材が集まっている。人間の教育という至難の事業に、我が生涯を捧げようという使命感に燃えた学生と共に、切磋琢磨できる事は筆者（土井）にとってこの上ない喜びである。そして、「先生」を養成するという重大な使命を担っていることに襟を正し、誠心誠意、学生の成長のために尽くしていきたいと願っている。信州大学に奉職して22年目になるが、筆者にはどうにもがまんがならない不満が一つある。それは、学生が掃除をしないことである。この思いを渡邊伸教授にぶつけた。キャンパスのゴミを拾いながら歩いておられる渡邊教授の後姿を筆者は何度も目にしてきたからである。教育学部にはたくさんの授業科目があるが、掃除について教えたり実践したりする科目は一つとしてない。そこで、掃除をカリキュラムに取り入れた教員養成を実践しようと、二人は意気投合した。

教職への強い志を抱いた学生が、実践的指導力（人間力）を錬磨することを目的として、早朝自主研修会「現代教師学演習」（8:00～8:50）を始動した。それは平成10年（1998）12月18日のことであつた。会場として長野県警察本部体育館「武徳殿」をお借りすることができた。大正元年（1912）に建てられたこの武徳殿は、威厳と風格があり、これからの我が国の教育を担って立つ学生が、丹田を鍛え、師魂を養うのに最もふさわしい場所であつた。この始動日を第1回として、毎週月・水・金に開講してきた早朝自主研修会は、平成25年（2013）5月21日で通算1,398回となった。

武徳殿をお借りした理由は、これから教師として巣立つ若者に武道の心得を授けたかったことと、教育者としての人格を形成する上で、例え警察官が見ていようといまいと、天に羞じることのない丈夫に大成していただきたかったからである。この微志を了とされ即座に使用許可を与えて下さった長野県警察本部に対し、深く敬意を表するものである。武徳殿は平成12年（2000）7月31日の通算240回目の稽古までお借りし、その後は教育学部の武道場や体育館に稽古場所を移して今日に至っている。

2. 早朝自主研修会に参加した学生と教員の人数，研修内容

表1 学生と教員の参加人数と本学部の教員就職率

	卒業年度 平成(西暦)	研修会の 開催回数	学生と教員の 参加人数	本学部の 教員就職率
1	10(1998)	第1回～第39回	27	48.5%
2	11(1999)	第40回～第187回	124	51.4%
3	12(2000)	第188回～第336回	95	57.5%
4	13(2001)	第337回～第473回	109	69.2%
5	14(2002)	第474回～第606回	96	69.2% 全国第1位
6	15(2003)	第607回～第737回	97	64.5%
7	16(2004)	第738回～第865回	146	68.20%
8	17(2005)	第866回～第986回	149	62.05%
9	18(2006)	第987回～第995回	10	63.45%
10	19(2007)	休講	休講	62.61%
11	20(2008)	第996回～第1117回	162	63.68%
12	21(2009)	第1118回～第1203回	70	69.29%
13	22(2010)	第1204回～第1244回	63	68.42%
14	23(2011)	第1245回～第1264回	99	65.33%
15	24(2012)	第1265回～第1367回	60	未定
16	25(2013)	第1368回～第1392回	72	未定

平成10年12月18日の第1回から平成25年4月19日の第1,381回までの学生と教員の参加者数は、表1の通りであった。学生の自主的参加があつてはじめて成り立つこの研修会は、寒稽古においても暑中稽古においても、1回として学生が一人も来なかったという日はなかった。まさに師弟同行・師弟共育を実践する道場であった。

学生が最も苦手としているのが早起きである。この研修会に79回出席した東京都出身の学生は、早起きについて次のように述べている。「早起きは三文の得というが、まさにその通りである。信州の朝は特に素晴らしい。山や田、道端の緑が朝日を浴び、一層鮮やかに輝く。さわやかな風が吹き、小鳥が歌う。自然の中で自分は生きているのだと感じ、嬉しくなる。そして、優しい気持ちになれる。これが信州の人間性の原点ではないかと思う。私自身も子どもたちも、自然の恩恵に気付き、常に感謝し、喜びや優しさをもって共に成長していけるような学校生活を送っていきたい。」^{注1)}

研修内容は、道場の自問清掃^{注2)}、準備体操、呼吸法、礼法、受け身、マット運動、講話、集団討議、面接、200字小論文などである。夏にはこの他にキャンパスのゴミ拾いや草取りなどの作業も行われる。さらに鉄棒、跳び箱、バスケットボール、バレーボール、表現

活動、大縄跳びの練習も加わる。これらの体育実技の後に教科専門教養と教職専門教養の学習会が開かれている。

平成15年12月24日に行われた第701回目の研修会に参加した学生は、早朝自主研修会を通じた自己の成長を次のように振り返っている。

『現代教師学演習』において学んだこと、それは自分から進んで何かをする姿勢、そして継続する姿勢の大切さである。他にも学んだことは数え切れないほどあるが、大きくまとめるとこの二つにまとめられると思う。私は実家から1時間ほどかけて通っているので、この演習に出席するには5時起きだった。初めての頃はとてもつらく、行くのが億劫になることがよくあった。しかし、そんな思いはいつの間にか消えていた。まずキャンパスのゴミ拾いや草取りをする。挨拶をして運動をし、最後に面接の練習をする。この過程一つ一つがとても緊張感のあるもので、私は心の底から湧いてくるやる気を感じた。実際、自分から積極的にゴミ拾いをしたり、運動したりすることで、終えたときにとても満足感、充実感が残っているのがよくわかった。それまで私は、他の人がやっている後についていくことが多かったが、この演習で自分から進んで行動することが、こんなに気持ち良く、充実感のあるものだということを実感できた。そして、その姿勢で臨むことで、私は自分に自信が持てるようになった。失敗しても間違えてもいい、とにかくやってみることを心掛け、友人や先生に大いに啓発された。その結果、多様な見方、考え方ができるようになり、自分はこうだと主張できるようになった。多くの失敗や挑戦が私の自信へと変わっていったのである。そして、私の座右の銘『継続は力なり』の大切さも再認識することができた。週3回継続することで、私の心が鍛えられ、視野が広がっていったのが、自分自身よく分かる。この演習に出席して、私は自分自身を大きく成長させることができ、本当によかったと感じる。ここで学んだことは、教師として大切なことばかりだ。日常生活の中でも、学んだ姿勢や多くのことを心掛けていこうと考えている。完成した自分なんてものはない。常に向上心を持って自分を磨くことを大切にしたいと強く思う。」

3. 「現代教師学演習」から「信大 YOU 遊未来」未来道場への転換

授業外活動として始まった「現代教師学演習」は、月・水・金の早朝8時から実施されてきているが、平成20年度からは学部教務部会の薦めで高年次の教養科目としても実施されることになった。授業外活動としての取組と授業科目としての取組の両方で実施され今日に至っている。平成24年度は前期の月曜1コマ目の「現代教師学演習」を32名が受講した。平成25年度は42名が受講している。

平野吉直教育学部長のご出席のもと、平成24年4月7日に「信大 YOU 遊未来 (CHANCE)」が新規に発足した。そして、学生主体の地域貢献活動である「信大 YOU 遊未来」のプラザの一つとして、「未来道場」も新しく発足した。この意図は授業外活動「現代教師学演習」の伝統を引き継ぎつつ、新たに学生主導で運営する組織へと転換することであった。教員主導から学生主導の「現代教師学演習」へと転換する CHANCE は、平成24年3月10日(土)

～11 日（日）に長野市大岡老人福祉センターで行われた「大岡ぼっこ」で訪れた。学生が大岡の子どもたちと一緒に、地域のゲートボールクラブの老人と交流するイベント「大岡ぼっこ」（日向ぼっこに因んで学生が命名）が実施された。雪が深く寒い大岡の地でこの取組を企画した学生たちが、教員採用試験に向けた勉強会を自主的に開始したいという強い願いを語った。学生の内側から生まれてきたこの強い願いを絶好の CHANCE として生かしたいと考えた。そこから瞬時に生まれたアイデアが、授業外活動「現代教師学演習」を「信大 YOU 遊未来」の一環として位置づけ、従来の教員主導の「現代教師学演習」を学生主導の「信大 YOU 遊未来」未来道場へと転換することであった。このアイデアは満場一致の賛同を得て、言語教育 4 年田中沙結美が初代未来道場長に選ばれた。そして、第 1,256 回目の初稽古が、有志 6 人によって平成 24 年 3 月 16 日に教育学部武道場で行われた。

4. 「未来道場」の哲学

本学部は平野吉直学部長の陣頭指揮のもと、教員就職率日本一を目指して様々な施策に取り組んでいる。「未来道場」の取り組みはささやかではあるが、学部教育方針に寄与するところがあると確信している。16 年間 1,300 回以上にわたり早朝自主研修会を愚直に実践している筆者（土井）の教育哲学、信念はおおよそ次のようなものである。

信州教育の名は死語になったという見方もあるが、信州教育は死なずという実証を示したいというのが、不思議な縁あって信州大学教育学部に赴任した当初の願いであり、今も変わらぬ筆者の畢生の誓願である。信州教育の持つ精神性、哲学性を現代に蘇生させ、肚のできた教育者を全国に輩出することを「未来道場」の使命としている。人類の教師の一人とされる釈尊は、万人に「仏性」という無限の可能性が秘められていることを開示した。自己の内に秘められた無限の可能性の開花を目指して、師弟が同行の汗を流し、子どもたちの喜びを我が喜びとして、師弟が共育の道を歩むところに人間教育の本源があると信ずる。この人間教育の実践は、大乘仏教が示している菩薩道の実践に通ずるものであるといえよう。^{注3)}

21 世紀の我が国は、かつての「軍事大国」、「経済大国」の反省の上に、今、「生きる力」に満ちた「人道大国」を目ざして進んでいる。日本一のアルプス連峰と日本一の信濃川を擁する信州の清き風土から、古来幾多の一流人物が輩出した。信州大学に集った我らも道一筋に学び、先人の跡に続こうではないか。信州の地より今再び学生パワーによる教育興隆の波を起こそうではないか！

「我が友よ、事を為すは人にあり。されど、事の成るは天に在り。朝夕祈れ、我が友よ」
（木下道雄）

「夫レ教育ハ 建国ノ基礎ニシテ、師弟ノ和塾ハ 育英ノ大本タリ」

（第五高等学校教授・夏目金之助、明治 30 年（1897）10 月 10 日）^{注4)}

5. 教育学部教員による 20 分間の講話と学生の教職への使命感の自覚^{注5)}

5.1 「子どもの潜在能力」

平野吉直 教育学部長（スポーツ科学教育講座）は、率先して「未来道場」に駆けつけてくださっている。このことに深い敬意を表して、「子どもの潜在力」について語られた講話メモを次に紹介する。

アメリカのベストセラー作家であり、海洋生物学者であったレイチェル・カーソンは、晩年に幼い甥のロジャーと何度となく森や海岸に出かけました。雨の日や夜にも探検をしました。彼女は、自然の不思議さや美しさをロジャーとともに感じ、著書『センス・オブ・ワンダー』を記しました。その中で、自然は人間に対して、とても大切な多くの学びを授けてくれることを彼女は伝えています。とりわけ子どもにとって、知識は感性という土壌の上に育まれるとし、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じていると述べています。これまで長い間、子どもを対象としたキャンプなどの野外教育活動に、数多く指導者として携わってきた中で、レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』の思いに、強く共感することができます。自然体験活動は、子どもたちに多くの学びの機会を提供してくれます。

私は、毎年小学校3・4年生を対象とした5泊6日のキャンプを戸隠高原で実施しています。今年の夏も、78名の子どもたちとキャンプを行いました。今年は全国的な猛暑でしたが、長野市内に比べて気温が6〜7度涼しい戸隠キャンプ場は、雨さえ降らなければ別天地です。キャンプは、天候にも恵まれ驚くほど順調に進みました。その中で、例年もっとも大切にしているプログラムが登山です。戸隠キャンプ場から戸隠スキー場、そしてスキー場の最上部である瑯瑯山を経由して標高1,917mの飯綱山に登ります。その後、戸隠中社の民宿でお風呂に入り、また2時間近くかけてキャンプ場に戻ります。標高差750メートル、全行程15kmという登山です。登山では、大人でもへこたれるような行程を全員歩きおしました。「もう歩けない」「もういやだ」など、座り込んだり泣いたりして学生リーダーを悩ませた子どもが数名いたものの、自分の力で歩きとおすことができました。暑さのためか例年になく苦戦する班が多く、最後の班がキャンプ場に到着したのは9時15分を過ぎていました。これまでの到着時刻を更新して、最も遅い到着の第1位です。子どもたちの潜在能力に、とても驚かされます。そして例年見られることなのですが、登山を終えると子どもたちが大きく変わります。大人でも大変な登山を自分自身の力で歩きとおしたことへの達成感と自信が、登山前に比べて子どもたちをやさしくし、班の友達と仲良くなり凝集性を高めます。

現在、わが国では、子どもの「生きる力」の育成を教育の最重要目標に掲げています。「生きる力」とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康と体力」の3つの要素からなる力です。この「生きる力」は、学校における学習だけで身に付くものではありません。教室の中ではなく、教室の外(Outdoor)で実施される体験活動によってこそ効果的に育成できる力が多くあります。その一方で、体験活動は「生きる力」を育成する上で、万能ではないのも事実です。子どもたちの発達課題を考慮し、それに相応しい目的・内容・実施方法がセットになった教育プログラムが不可欠です。視点を変えれば、子どもの発達段階ごとに必要な「生きる力」があるはずであり、それに応じた具体的かつ効果的な教育プログラムがあるはずであると考えています。

この講話を聴いたある学生は、「子どもの可能性」についての理解を深め、教職への使命

感の自覚を次のように記述している。

「今日、平野学部長先生のお話を伺い、子どもの可能性について教えていただいた。私が教員となったとき、子どもが今まで出来なかった事が出来るように指導したい。そのためには、子どもの現在の状況を知り、子どもたちに応じた指導の方法を考える必要がある。子どもは可能性を持っている。私は子どもの可能性を伸ばすために、子どもの姿を捉え、教材研究や教授法など自分自身の指導力を高めていきたい。」(臨床学校教育学分野4年)

5.2 「マット運動の指導について」

渡邊伸教授(スポーツ科学教育講座)は、早朝自主研修会の強力なリーダーとして第1回目から第1,000回目までの指導に当たった。豪雪の日も一度として遅刻されることがなかった。毎回の朝稽古の締めくくりは、渡邊教授の運動哲学の講話であった。マット運動の実技指導をしながら語られた講話メモを次に紹介する。

マット運動に限らず、器械運動には脚と頭がひっくり返る(頭越し)運動や姿勢が多くある。コツというのは、やっている本人への「どうやってやってるの?」という問いの答えに当たるのだが、実は、できる本人もあまりよくわからない。普通、「上手に立ってるね。どうやって立ってるの?」とは誰もきかないが、いつでも立つことができる我々でも答えられないように。脚と頭がひっくり返る運動などなおさらである。しかし、人間の身体は生まれてから1年足らずで立つことを覚える。身体は<考える>のではなく、<感じて動き、動いて感じる>のである。頭越しの局面では、初心者はいくわがわからない。どのように伝えればいいのか、自分ができても、初心の指導者は戸惑う。立つことを覚える赤ん坊を<導く>母親は、歩くという運動を科学的に理解しているわけではない。しかし、首がすわる、寝返りを打つ、頭を持ち上げる、這いずる、高這いする、よじ登る等々の運動が発生した後で、<立つ>動きができるようになることを知っている。だから、まだ這いもしない子どもを立たせようとはしない。<立つ>の材料になる運動が出そろってくれば、子どもは周りの物を利用して立とうとすることも知っている。マット運動の、例えば<前転>もこのように考えればいいのか。生徒の身体に<材料>となる動きがどれだけ育っているかを見きわめなければ、足し算を理解しないのにかけ算をするはめになったように<できない>。さらに、運動の指導の場合、何が課題となる動きの材料になるかは、ひとり一人の身体によって異なる。生徒たちの身体はそれぞれ異なる歴史を持っているのだから。指導は、課題の動きを多様に分節でること、そして学び手の身体を課題に向かって<読み解く>ことによる。しかし、実際には「この子の場合は、こうだ!」と、いつもの確な打つ手が出てくるわけではない。出会う生徒の身体を読み解くのは、今まで出会ってきた<できない>身体を読み解こうとしたことの痕跡なのだ。

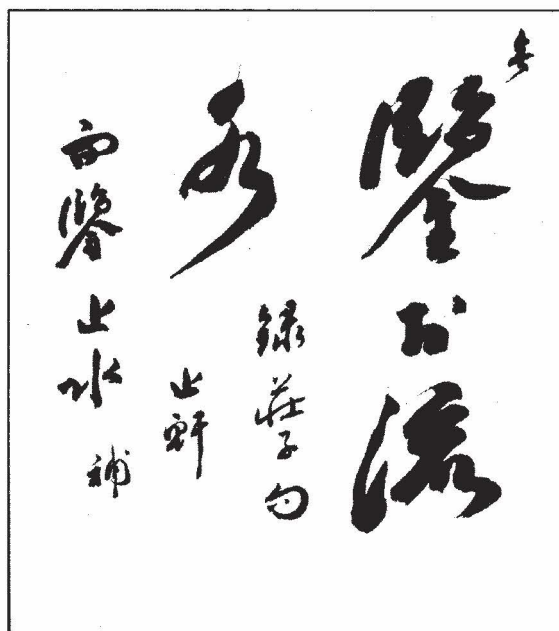
この講話を聴いたある学生は、器械運動の指導を受けて教職への使命感の自覚を次のように記述している。

「今日は、器械運動の指導をしていただいた。その中で、一番感じた事は、出来ない子の支援をするためには、出来ない気持ち、出来ない理由をとらえること、出来るまでの細かいステップを組むことの大切さである。今日の指導を受け、どうすれば出来るようになりそうか見通しをもつことができた。このことは教科の指導においても共通することだと思う。」(数学教育分野4年)

5.3 「己を鏡に映すこと」

西一夫教授（言語教育講座）は、諸橋轍次博士の直筆の色紙を学生に見せながら、感銘深い講話をされた。その講話メモを次に紹介する。

私たちが普段の生活において己の所業を振り返ることは、どれほどあるだろうか。己を振り返ろうとすると、私たちは己の眼でもって己の全てを見ることは実質不可能だと言うことを思い知らされる。そうしたとき、私たちは己を映す手段を考える。一つは「鏡」である。古来、「鏡」は神聖な物として理解され、扱われてきた。古代の豪族の古墳から大量の鏡が出土することからも鏡の神秘性が多くの人たちに認識されていたことが知られる。その要因の一つに「真実を映し出す」「姿を映す」ことがあげられよう。己の顔の細部に至るまでを己の眼では見られないこ



とを可能たらしめる存在であるのだから。そうした事実を可能にしている「鏡」は単に姿を映すのみならず、心をも映し出すと言われる。これは姿、とりわけ顔の「表情」に心の本質が表出していると理解されてきたからである。心を映し出す「鏡」は、対象を正確に映し出さねばならない。なぜなら、繰り返し述べているように対象物を己の眼で実見できないのだから。このように考えてみると私たちが「鏡」に認めてきた信頼の大きさや畏怖の念が思われるだろう。「鏡」に対する上記のような思いは現代ではほとんど失われている。だが、今一度考え直してもよいだろう。情報が発達した世の中で、私たちは何を「鏡」として信頼を寄せ己の姿を委ね、真実の姿として見るのだろうか。

ここに一枚の色紙がある。落款がないのが惜しまれるが、揮毫は『大漢和辞典』で知られる諸橋轍次氏である。以前、私が奉職した巣鴨学園の学園祭での「修養について」と題する文化講演会(昭和42年10月)で来校の砌、当時校長の堀内政三氏が揮毫を願い出た。『莊子』(徳充符)に録される「流水に鑑みる莫くして、止水に鑑みる」である。意は「流れる水に己の姿を映すのではなく、静かにとどまる水に姿を映し、鏡とする」である。さらにこの句は、流れていない静かな水を鏡として姿を映せば、己を正しく見られることから、修養を積み、心静かにこたわることなければ、自分自身と同時に、物事の真理を悟ることができるというのである。己を映す対象を見極める洞察力や映し出された姿の理解など、教師を目指す諸君にとって心静かに己と対峙することは、時に残酷でもあろう。だが、それを知って子どもたちの前に立つか否かでは、何よりも人としてのあり方が大きく違はずである。己が信頼を寄せる「鏡」は「流水」であるのか「止水」であるのか。それを見つめ続けて問い続けることは、いかなる人も失ってはならない「心がけ」ではないだろうか。

この講話を聴いたある学生は、「明鏡止水」と題して次のように記述し、教職への使

命感の自覚について考察している。

「今朝は国語科の西先生がお話して下さった。流水ではなく止水に自分の姿を鏡のようにして映すべきだという内容だった。止水というのは「静かな心」を表現しているのだと思う。一つの波もないような水面というのは自分自身の心が反映される。その中で自分の行いを反省したり、次の目標を設定したりすることが出来るのだと思う。私は以前に「明鏡止水」という言葉を聞いたことがあるが、その言葉に近い内容だったと思う。」（臨床学校教育学分野4年）

6. 教職への使命感の自覚を促す講演会の開催

筆者（小岩井、当時は長野県教育委員会東信教育事務所・生涯学習課長）は、平成 24 年 5 月 15 日に未来道場が主催する講演会に招かれた。これまでの研究と教育の実践に基づきながら、前途ある学生たちに全魂を傾けて 90 分の講演を行った。学部 4 年生と大学院生を合わせて 25 名が聴講した。筆者は青木村の教育長時代に信州大学の学生たちと一緒に「あおきっこ通学合宿」を創始（2006）した。次いで長野市立大岡小学校長時代にも信大生とともに大岡「通学合宿」を開始（2009）した。そのご縁で未来道場の学生たちから講演の依頼を受けることになった。講演の要旨は次の通りであった。

6.1 「どんな教師になるか」の前に「なぜ教師を目指すのか」

どんな教師になりたいかを議論するまえに、もう一度、自分がどうして教師をめざすのかを考える必要がある。教師という職業について、もう一度、自分の生き方と照らして考えてみることを勧めたい。ある保護者が「子どもは未来からの預かりもの。しっかり育てて未来に返してやらなければ」と言ったことがある。このことを大切にしたい。子どもに向かうということは、未来に向かうことに等しい。未来の日本を、未来の世界をどう見据えているのか。自分がどんな人生観や世界観を持って未来に向かうのか、このことについてじっくり考える必要がある。「子どもに好かれる教師になりたい」「保護者から信頼される教師になりたい。」そんなことではない。「子どもが好きだから」「子どもといると楽しいから」「先生に憧れていたから」などは教師になる理由にならない。常に「なぜ教師なのか」を自問し続けてほしい。その答えは自分自身がどう生きるかの中にしかない。学びの中からしか生まれない。

6.2 子どもの背後にある多くの願いに謙虚に向かう

「私のようなものが、子どもたちの前に立たせていただいている」。そして、「先生」と呼ばれている。このことをしっかり認識する必要がある。子どもの背後には崇高な多くの願いがある。一人の子どもは、両親、祖父母、兄弟など少なくとも 6 つ以上の愛情や願いに支えられて生きている。その愛は、私たちの想像を超える深いものである。そうした「愛」や「願い」を謙虚に感じとることを大切にしたい。子どもの前に立たせていただいている。ご縁をいただき、おかげさまで、子どもたちと一緒に学びの道を歩ませていただいている。子どもたちにいただいたご縁の中で生かされている私である。そういう自覚が必要だ。

では、子どもたちにどのように向かうのか。まず、子どもを真ん中にして、教師としての自分が見取った真摯な発信をすることが大切だ。人からの批判や、自分がよく見られたいなどという視点ではなく、子どもの今をきちんと分析し、今、何をすることが子どもの将来につながるのかを考えたはっきりとした発信をすべきである。そして、子どもを真ん中にして、保護者、地域社会と真摯な議論を積むべきである。創造的な仕事をする時は、自分の中に、不安や困難や危機感を持っているものだ。常に挑戦し、既成の概念にとられない創造的な一歩を踏み出す熱意を持つことが大切だ。批判を恐れてはならない。真摯な発信に対する批判は耳を傾けるべき大切な要素を含んでいる場合が多い。批判を受け入れることも大切だ。そのことが自分を大きくすることにつながる。

多くの願いを感じ取れる自分になるために、多様な他者と多様な関係を結び、人に対する関心や愛着や信頼感を自分の中に持つ経験を十分に積む必要がある。地域に出て多くの人に直接関わり、共に活動することを勧めたい。

6.3 教師の資質とは何か

教師の資質は、「子どもの感性に畏敬の念をもって接することができるか」に懸かっている。子どもを自分に引き寄せて理解するのではなく、自分が子どもの目線に立って、子どものありのままを理解し、その中に、自分を越えた子どもの感性に畏敬の念を持って接することができる自分自身を作っていく必要がある。そのために、「自分づくり」「自分鍛え」が大切だ。自己の無力さに対峙しつつ、常に教師として学び続け、自己実現する気力が必要だ。

6.4 教材研究の意味

子どもに向かうためには確かな教材研究が必要なことは言うまでもない。教材研究は、教師である「私」の心の歩みそのものであり、教師の資質として、子どもの発想の豊かさやすばらしさに気づくために不可欠なものである。自分の教材研究と子どもの発想や行動との「ずれ」によって、教師は初めて心から子どものすばらしさに気づくことができる。教材研究に真摯に向かわなければ、それを越えた子どもの感性に驚きと感動を覚えることはできない。子どもが、教師を越えた感性を持っていることに気づくためにも、教師には飽くことのない教材研究が必要だ。そこに教材研究の醍醐味と「私」としての感性を磨く場があると考えます。

6.5 一人一研究の奨励

教師が自分の専門分野を持ちそれを追求することは、物の見方や考え方を深め、魅力ある教師づくりにつながる。子どもは、信頼できる教師からしか学ばない。教師自らが研究し、学ぶ後ろ姿を見せることが、子どもに学ぶ意欲を育てる上で大切である。「研究＝教育」である。教師は学び続けなければならないと考える。そして、その成果を、自分の夢として語る熱き思いを自分の中に育てたい。大学は、自分の学問を形成する大切な時期である。そのためには、多くの人の生き方に触れ、自分を見返してほしい。国内情勢だけでなく、海外情勢にも目を向け、自ら足を運び、肌で感じることを勧めたい。

6.6 人と人を結ぶ地域のコーディネーターとしての役割

子どもたちに多くの地域の人々と直に接し心をつなぐ場を設定することで、人に対する関心や愛着や信頼感を育てたい。そのために、学校での人的関係をできるだけ豊かにする必要がある。教師自身が一人の生活者としての目を持ち、地域の一人として活動することが大切だ。子どもの願い、親の願い、地域の願いを汲み取り、人と人の心をつなぐ地域のコーディネーターとしての役割を果たすことが大切だ。「地域素材は人、教材化の視点は心」という発想が大切だと考える。そのことが、子どもたちの心に地域への誇りを培い、将来にわたってふるさとを築いていくことにつながると信じるからである。多くの人の力を学校に取り入れることで、学校が活性化し、子どもたちの育ちの場になると考える。そして私たち教師が学べるのだ。

6.7 熱き思いの継承

最後に、先輩から後輩に口伝されてきた熱き思いを継承していくことが重要である。口伝とは、人格から人格への心の伝達だと思う。木村素衛先生(1895-1946)が、信州の教師の心の支えとなり、命をかけて教育の何たるかを伝えてくださったことはあまりにも有名である。上水内の雪深い山の中から先生の講義を聴きにきた青年教師に、先生が「どうしてそこまでして講義を聞きに来るのか」と尋ねたとき、その青年教師は即座に「下卑た教員にならないためです」と答えたという。^{注6)} この思いを自分自身の実感として捉え、自らが実践することを心がけていきたい。そして、それを実感として後輩に口伝できる教師でありたいと思う。謙虚に学びつづける者でありたいと考える。常に子どもを真ん中にする覚悟が必要だ。木村素衛先生の「教育に当たるものはすべて無名戦士の墓を思うべし」^{注7)}を胸に刻みたい。自分のようなものにすべての信頼を寄せてくれる子どもたちに、嘘、偽りのない真実の姿で向かいたい。金や地位や名誉やそんなものではないのだ。子どもの今に未来を見ながら、自分の命をかけていく、そこに教師としての生き方がある。だから、苦しいし、だから本質的な人生につながるのだ。そして、このような人との邂逅が、自分の人生を決定づけていく。森信三先生(1896-1992)は「人生、出会うべき人に必ず出会う。しかも、一瞬遅すぎずに、一瞬早すぎずに。しかし、うちに求める心なくば、ついにその縁は生じない」と言っている。人は出会いによって生かされる。自らが子どもたちにとって「邂逅」であるかを常に問いたい。初任は人生で一度だけである。子どもたちを含め、後から来るものの心に「灯」を灯すには、自分が熱を持って生きる必要がある。熱き思いをもって二度とない人生^{注8)}を教育にかけて生きよう。

6.8 講話後の学生の質問に答えて

「子どもをどのような大人に育てるべきか。」非社会化が進む現代、子どもたちが人として育ちににくい環境にある。内閣府のひきこもり調査(2010)^{注9)}によれば、15歳から39歳に限定した引きこもり青年の数は約70万人、その予備軍は155万人と推定している。この数は長野県の総人口に匹敵する。ヒトは人の中でしか人になれない。子どもたちが社会の大切な構成員として、人とつながり新しい社会を構築する力(社会力)を身につけるた

めには、多様な他者と直に相互に行為し、他者を自分の中に取り込むことを通して、人に対する関心や愛着、信頼感を育てていくことが不可欠だ。また、自分の「やってみたい」「面白そうだ」をやり尽くす遊びの経験も重要である。そのことが自己肯定感や自尊感情の源基になると考える。「やらされ感」と「幼児的万能感」からの脱却こそ子どもを育てる原点になる。子どもたちにこの環境を与える覚悟が必要である。「危ない」「汚い」「うるさい」と子どもの遊びを禁止するのではなく、多様な他者の一人として子どもの前に立ち、多くの大人とふれあいながら、遊ばせる環境をつくることは非常に重要である。「万が一」に対応する危機管理も大切だが、9999の可能性を考えることはもっと大切だ。

学校的な微視的な観点で子どもを捉えるのではなく、人生80年を生きていく意欲を育てる生涯学習的な視点で子どもを捉えたい。そのためには、リンゴの実一つを育てるのではなく、じっくりリンゴの木を育てる覚悟が必要だ。多様な実をたくさんつける根っこをしっかりと張らせてやることが、義務教育の大きな役割である。そして、このことが、将来、人間が大好きな、メシの食える大人に育つことにつながると考える。

この講演を聴講した学生、院生からは次のようなレポートが提出された。この記述の中に教職への使命感がしっかりと自覚されていることが看取される。

①「授業をするということ」「改めて「子どもが真ん中」ということについて考えた。私は今まで教科書のとおりにならぶ授業しか経験したことがなかったので、附属小で基礎実習をしていたときに戸惑い、子ども自身が学習問題を立てるにしても、結局は誘導しているだけなのではないかと悩んでいた。しかし、「教科の内容を自分というフィルターをとおして口伝する」という言葉から、何か前へ進めたような気がする。これからも追究していきたい。」(学生4年)

②「傲慢になってはならない」「教育に当たるものはすべて無名戦士の墓を思うべし」。地位や役職に関係なく、目の前の子どもに謙虚に向き合うことが大切だ。今、YOU 遊の運営委員長をやらせてもらっているのだが、傲慢になってしまうときがある。そういうときほど他者の意見を受け入れることができない。その時に今日いただいたこの言葉を思い出し、自分を戒めるようにしたい。最も価値があることは地位や名誉ではなく、未来を創る子どもたちと関わることである。」(学生4年)

③「あぶない、汚い、うるさい」講義の中で特に印象的だったのは、現代の子どもが「生きる意味」を見いだせずに引きこもりになる割合が高いということだ。そして、その原因は、子どもが自尊感情を持っていないことにあり、子どもの自尊感情を育むためには、子どもの「面白そう」や「やってみたい」という思いを大人が十分認め、「あぶない、汚い、うるさい」という理由でつぶすのではなく、その子どもが満足しきるまでやらせてやることが大切だという話だ。子どもの思いは小さく危ういが故に、大人によって恣意的に扱われてしまいがちだが、やはり大切に受け止めなくてはならないと感じた。」(大学院1年生)

④「一人の人間としてのあり方」改めて、教師として、さらに一人の人間としてのあり方が問われているような気がした。これは、小岩井先生が教師に必要な三つの条件としてあ

げた「実践」「理論」「構え」の中の「構え」に通じるものだと思う。自分はなぜ教師になったのか？そして、今、なぜ大学院で学んでいるのか？その問いに対して子どもを常に真ん中に置いて考え、自分なりの核となる答えをこの2年間で見つけたい。今までの自分を一度突き放し、視野を広げられるよう努力していきたい。」(大学院派遣教員)

⑤「教師こそ子どもを尊敬しなければいけない」「教員になりたいという小さい頃から今までの夢があり、「なぜ教員になりたいのか」という問いに私自身何も答えられなかった。教員という言葉は、インドネシア語に通訳すれば「GURU」である。グルとは「尊敬しなければいけない人」だが、本日の話を聞き「やっぱり違う！」ということがわかった。子どもを中心に教えることが教員の仕事である。もし、私が教員になれるとしたら、一人ひとりの子どもの姿を大切にやっていこうと思う。」(大学院1年生、インドネシア留学生)

7. 受講学生の教職への使命感の自覚

平成24年度の「信大YOU 遊未来」未来道場の道場長を務めた田中沙結美は、教職に立ち向かう自己の使命感について次のように述べている。

「教育において、私は子どもを中心に考えることが何よりも大切だと考える。また、中心にいる子どもたちのまわりには、どれだけ沢山の人がいるのかを考えることも重要である。今年は、教員の不祥事が目立った。教師の過ちによって傷つくのはその子どもだけではない。子どもたちの保護者、地域の方々などの信頼も同時に失うことになる。多くの人たちが子どもたちを支え、子どもたちに願いを寄せていることを決して忘れてはいけない。私は教師として、常にこのことを心に刻み、教師としての使命感に燃えて精進していきたい。」

また、保健体育専攻4年山田裕利は、未来道場での稽古を積み重ねていくことによって、自己の教職への使命感の自覚が深化してきたことを次のように振り返っている。

「子どもを大切にする、これが未来道場に行く前の私が持っていた教職への使命感であった。今思うとこの「子どもを大切にする」ということが、この時はとてもあいまいなものであった。どう子どもを大切にすればいいのか、どんなことをすればいいのか、全く分かっていなかった。しかし、未来道場に通うようになり、沢山の人と関わり、沢山のことを学び、具体的にどんなことをすればいいのか、子どもを大切にするとは、どういうことなのかが見えてきた。自主的に参加したこの活動によって、私の教職への使命感はより強く具体的なものになった。今の私が教職への使命感として自覚していることは、『子どもの心の奥底までを理解しようとし、子どもに全力で尽くすこと、そして、常にこれに向けて自分を向上させようとする』ことである。未来道場に行き、私の使命感はこのように変わり強化された。私はこれからもっとたくさんのことを学び、向上心を持ち、自分の使命感を強くして行きたい。」

早朝自主研修会「未来道場」は学生同士が切磋琢磨し、人間力を磨き、鍛え合う道場である。そこに教員も寸暇を割いて出かけ師弟同行・師弟共育を实践する。ここにあるのは

徹底した主体的・自主的な取り組みであり、自律的な実践である。ここに早朝自主研修会の本領があり、信州教育の精髓に通底するものがあると確信している。これまでの16年間に百名近い学部教員が忘れがたい名講話を学生の心田に与えてくださった。ここに衷心より御礼申し上げる。

注

- 1) 土井進 (2002) 「若い教師にとっての基礎・基本 20 箇条—教員養成学部における実践—」『信濃教育』第 1390 号, pp. 5-6, 信濃教育会。(早朝自主研修会「現代教師学演習」において、筆者が学生と共に実現したいと願った基礎基本は、①早起きは三文の得、②清掃の五徳、③靴を揃えて入る、④礼に始まって礼に終わる、⑤腰骨を立てて聴く、⑥先ず、名を名乗る、⑦継続は力なり、⑧教育の事、天下にこれより偉なるはなし、⑨報恩感謝の心、⑩体は鍛えるもの、心は養うものであった。)
- 2) 長野県師範学校の卒業生竹内隆夫 (1917-2010) が創始した学校掃除の方法である。ペスタロッチの教育愛、時実利彦の脳科学、井島勉の美学、戦後民主主義の自由平等の精神、そして大乘仏教の慈悲の精神を発想基盤として考案された。その方法は5段階から成り、どの段階においても教師は児童生徒を「ほめず・叱らず・世話をやかず」、一個の作業者となって師弟同行・師弟共育に徹する実践である。早朝自主研修会の冒頭において、学生も教員も自ら汚れを見つけて「自問清掃」に取り組んできた。第1段階は「意志力・やる気がまん」、第2段階は「情操・気働き」、第3段階は「創造力」、第4段階は「感謝」、そして第5段階は「正直・愿慇 (げんかく)」である。誰からも褒められることもなく、小世話をやかれることもなく、学生一人ひとりが自主自律の行動によって清新な朝を迎えるのである。愿慇 (げんかく) とは、Honesut Upright 真っ正直という意味である。周禮研究会を1,200回主宰した高田豊寿 (1912-1989) は、この言葉を用いて「厳格」な躰をやっても、いいものは出てこない。「愿慇」な躰をしなければいけない。根っからの教育をやるのが一番良い、と常々私たちに語って下さった。
- 3) 東京都文京区立第五中学校長を務めた戸畑忠政は、筆者が初めて教壇に立つに当たり教育者としての本領を示す言葉として、「悉有仏性、師弟同行、師弟共育」を揮毫してくださった。
- 4) 土井進編著 (2010) 『周禮 15 講—「先生」の教育—』信州大学教育学部, p. 7
木下道雄 (明治 20 年 (1887)—昭和 49 年 (1974)) は、昭和 20 年 10 月侍従次長として昭和天皇に仕えた。夏目金之助 (漱石) の句は、熊本大学構内の石碑に刻まれている。
- 5) 同上書 (p. 11, pp. 13-14, pp. 21-22) 本稿では、平野吉直、渡邊伸、西一夫の3名の先生の講話を取りあげることしかできなかった。他に村松浩幸、高柳充利、高崎禎子、高橋知音、三野たまき、伊藤冬樹、齊藤寛海、小松孝太郎、山本亮介、岡野雅子、栗原久、児玉邦代、大原明美、永松裕希、小田佳代子の各先生に道場に来ていただき学

生への講話をしていただいた。

- 6) 荒井英昭義務教育課長あいさつ要旨,「平成13年度長野県教委全県指導主事会議資料」(2002)。このあいさつ要旨の出典は,張さつき(1985)『父・木村素衛からの贈りもの』未来社である。「下卑た教師にならない」ことをめざす信州の教師たちのエピソードが紹介されている。「校長達がカントの『純粋理性批判』の原書を輪読していて,木村先生を迎えると,カントについて話を聞きたいというのであった。先生はあるときそのメンバーのひとりに,どうしてこんな難しいものを,しかも原書で読むのかと聞いてみた。すると『私たちも教育者として,下卑ないためです』と答えたというのである。」(p.145)
- 7) 張さつき(1985)『父・木村素衛からの贈りもの』未来社,「教育者は無名の戦士であると父はいう。名もなき一兵士であること以外何も要求しない。父は日本の運命を思いつつ教育することに心の限りをかたむけていた。」(p.141)
- 8) 森信三(1967)『森信三選集第二巻』実践社の14頁に,「人生二度なし」について次のように述べている。「この地上の『生』を全般に充実せしめるように生きねばならぬという一事に至っては,もはや何人も異論は存しえないはずだからである。これわたくしがかの『人生二度なし』という一語をもって,わたくし自身の人生観的真理の唯一至上の表現と考えるゆえんである。」
- 9) 内閣府(2010)「若者の意識に関する調査(ひきこもりに関する実態調査)」
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_gaiyo_index.html

(2013年1月30日 受付)

(2013年5月23日 受理)